

受賞者記念スピーチ ～永源寺の地域まるとケア～

東近江市永源寺診療所 所長(医師) 花戸 貴司 氏



本日はこのような名誉ある賞をいただき、また、スピーチの機会をいただき本当にありがとうございます。私の活動を報告いたします。

皆さんは、「健康」だと感じるのはどのようなときでしょうか。日本人の平均寿命は戦後すぐの頃まで50歳、そんな時代がありました。亡くなる原因は結核それに母子が多く、その対策としては、病院での治療をする、安全なお産を病院ですることでした。如何に病気を征圧するか、それを追求することが医療の役割でした。

言い換えると、病気や障がいとは存在しないことが健康と考えられていた時代。健康問題を解決するためには病院に行けばよい、あるいは病院に預けてしまえばよい、そんな時代がありました。

しかし、時代は変わります。日本人の平均寿命は85歳を超え、病気の種類も高血圧、糖尿病、認知症、がん等、急性・慢性という病気だけでなく「老い」という病態も加わりました。多くの人は病気や障がいを抱えながらも、必ずしも入院することなく地域で生活をするようになりました。

つまり、医学だけで今までと同じような健康を得られる時代ではなくなってきました。

では、どうすれば良いのか。今日は、私の考える、これからの医療、これからの地域をお話しさせていただきます。

私が永源寺診療所に赴任した18年前、こんな田舎でも最高の医療を届けようと思ってやってきました。でも、地域の患者さんからの最初の言葉は「先生はよう、まいらしてほしいわ」だったんです。最初は意味がよくわかりませんでした。しかし、18年地域で活動して、なんとなく意味がわかってきました。

今日はそんな話をさせていただきます。

永源寺地域は、人口5,400人、高齢化率34%の山間農村地域です。永源寺診療所には、医師は私一人だけ、入院設備はありません。外来にいられている患者さんが通院することができなくなれば、隣の病院へ入院するか、施設に入所、あるいはそのまま家にいて訪問診療（往診）を受けるか、いずれかになります。

一人暮らしであっても、認知症であっても、障がいを抱えておられても、皆さん笑顔で生活されています。

私が往診をしている在宅患者さんは80人。4歳から103歳までと幅広く、いろんな症状の患者を診ています。看取りも多く、永源寺で年間亡くなる人60人の半数以上を在宅で看取っています。



しかし、医師一人で、在宅医療はできません。いろんな専門職、医療、介護、行政がつながること、つまり多職種連携が必要です。

私の診療所では、往診している患者さん一人一人に対し、毎月いろんな職種の人が集まって「サービス担当者会議」を開いています

スライドの絵のように、患者さんを中心に据え、診療所・介護のスタッフ、家族、宗教者、薬局、行政、訪問看護、ご近所さん、みんなで支える。これが在宅医療の本来の姿ではないかと思っています。

患者さんを診させていただくと、本当に望んでおられることは何だろうと思います。例えば、病気がなったとき誰しも治りたいと思うものです。しかし、その病気が今の医学では治らない病気（がんの末期、

認知症、生まれつきの障がい）であったなら諦めるしかないのでしょうか。いいえ、そんなことはないと思います。私は、患者さんにはこのように話をしています。

治療で病気がそれ以上小さくならなかったとしても、病気の反対にある元気の部分を大きくすれば相対的に病気は小さくなりはいませんか。だから、病気であっても、できるだけ元気を大きくするような生活を心がけてください。そうお話ししています。

ところが、そのようなことを考えず、病気がかりに目を向けていると大切なことが見えなくなることがあります。例えば、現代の医療にすぎると、元気の部分がゼロになる、つまり、会話ができない、ご飯が食べられなくなっても病気の部分だけを支える医療、いわゆる延命治療を受けることはできません。

しかし、目の前の患者さん達は誰一人としてそのような治療を望んでおられなかったのです。

「はよう、まいらしてほいわ」の意味するところは、「年老いても、障がいを抱えても、元気をもって自分らしく地域で過ごしたい」「単に寿命の時間を伸ばすだけの治療は御免である」そう願っておられる患者さん自身の言葉であると気づきました。

在宅の患者さんの多くは、病気を抱えながらも家で生活をしておられます。ですから地域で支える仕組みが必要です。

私の地域、東近江地域には多職種が集まる研究会があります。研究会の名称は近江商人の三方よしをもじり、「患者よし」「（医療・介護）機関よし」「地域よし」の三方よし研究会としました。研究会は、月1回開催し、毎月100人を超える人が集まりま

す。中心におられるのは小串輝男先生、私は裏方の実行委員長をしています。当初は、「脳卒中連携パス」についての会議から始まり、どうすれば脳卒中の患者さんが地域に帰ってこられるかを話し合っていました。そのうち脳卒中以外の患者さんのこと、例えば認知症、心臓病、糖尿病、腎臓病、がん、あるいは高次機能障害の方も在宅で生活できるよう、医療・介護・行政等さまざまな職種の人が、皆で考えるようになりました。

多職種で考えていると、病気だけ診ていても解決できない問題がたくさんあることに気づきました。

永源寺地域では、地域版三方よし研究会「チーム永源寺」を立ち上げています。地域社会に出て行ってその人を支えようとしても、医療保険や介護保険には制度があり、行政にも限界があります。私自身が在宅医療の現場で一番支えになっていると感じるのは、「互助・お互いさんの力」です。

地域社会にある資源として、自分のことは自分でする「自助」、お互いさんで支える「互助」、医療保険・介護保険・年金といった「共助」、行政が関わる「公助」があります。

我々医療・介護職に求められているのは自分たちの専門性を高めるとともに、地域の方々との間に隙間を作らないこと。共助と互助の間の隙間を埋める、そういった地域とのつながりが大事なことでないかと考えるようになりました。

チーム永源寺は、パンフレットにあるように、最近では色々な人が集まるようになりました。医療職（医師、看護師、薬剤師、栄養士、介護関係者（ケアマネ、ヘルパー、社協）、商工関係者（移動販売による買い物支援）、行政や地域おこし協力隊の若



者、消防士、お巡りさん、お坊さん等の宗教者、福祉作業所・生活支援センターは障がい者の支援、働き・暮らし応援センターは就労支援、民生・児童委員、福祉推進委員、住民団体は地域の様々な方々です、生活支援サポーター「絆」は地域のボランティアアグループさん、ご近所さん、そして「あなた」もです。

地域の人達一人一人が、地域の人達一人一人を支える、そんな地域であれば、年を取ったとしても、認知症になったとしても、障がいを抱えたとしても、安心して生活ができる、永源寺はそういう地域になれるのではないかと感じています。

「地域包括ケア」というよりも「地域まるごとケア」地域みんなが地域みんなを支えようと思っています。例えば病院を退院して帰ってくる時、この薬を飲みなさい、このリハビリをしなさい、こういったことはしてはいけませんと、病氣中心の連携はこれまでからありました。でも、ここには生活が見えてこないんですね。ところが、地域に出ていくとコミュニケーションという横のつながりが生活を支えていたのです。この縦と横の連携をうまくつなぎ合わせることこそが、地域の人たちを支える一番の力になると感じています。

私の活動は、診療外の活動として、地域の老人クラブに出向いて健康教室を開いたり、乳児健診や幼稚園・保育園、小学校の健診にも行きます。少年野球チームのチームドクターもしています。小学校では、校医として各学年1時間の「いのち」の授業もおこなっています。それ以外にも、地域のボランティアさんと一緒に「本の読みかたり」に小学校へ行きます。自分がこの地域でできることをやりたい、そう

思っています。

「地域まるごとケアのびきること」

子ども達と接していると、今の子どもたちは、身近な「人の死」ばかりか、「老・病・死」の経験が圧倒的に少ないと思います。例えば、おじいちゃんが病気で入院し、施設に移り、息を引き取れば葬儀場へ直行。そのようなことはよくあることですが、子ども達がお葬式の場面だけを見せられて、おじいちゃんが生きてきた姿、頑張ってきたことを思い返すことができるでしょうか？なかなか難しいのではないかと思います。在宅医療は、我々が医療を届けるということだけではなく、子ども達に高齢者が生きていく姿、頑張っている様子を伝える絶好の機会だと思っています。そのような実体験こそが、命の大切さを学ぶ機会になる、そう信じています。

30年後に、在宅医療を目の前で見てきた子どもたちが年老いた両親を介護し、60年後自分たちが介護を受けるようになるかもわからない。そのような時代になっても、命の大切さはもちろん病氣や障がいを理解し、お互いがお互いを支えあう安心して生活できる永源寺という地域であってほしいと願っています。今、次の世代に伝えていかなければならないことがあると思っています。

これまでの高齢者や認知症、障がいのある人の政策は、「わけて、あつめて、しるる（施設入所）」が多かった。これからの時代は、「まぜて、ちらして、つなぐ（地域社会）」そんな時代になりつつあるのではないかと思います。支援も大切ですが、共に生活する共生の世界をめざしていければ、そう願います。私が考える地域医療というものは、「地域で医

療を行う」だけではなく、医療をとおしての「地域づくり」だと考えています。

この永源寺診療所に赴任したすぐの頃、私の家の裏口に畑でとれた野菜が置いてありました。名を乗らぬお礼をいただいたとき、感謝の気持ちが伝わってきたのを今でも忘れることができません。私がやるべきことは、ものをもらった人に何かを返すのではなく、地域のために何ができるか、そう考えてきた18年だったように思います。

よく先生の専門は何ですか？と尋ねられます。小児科医ですよねとか、在宅医療を80人もやっていたら在宅医療が専門ですよね、といわれることもあります。そんな時、「私の専門は永源寺です」とお答えしています。

永源寺に住んでいる人のことであれば、子ども、お年寄り、病氣や障がいを抱えている人、いろんな人のことが分かっていたつもりです。そして、地域の人々が何か健康問題で困ったことがあったとき、我々はどういうチームを集めどのような支援ができるか、そして、ご近所さんや民生委員さんなど地域の誰に相談したらよいのか、18年やってきてなんとなく分かっていたように思います。だから私は、これからも永源寺のために、自分のできることを頑張りたい、そう思います。

そして今回、このような名誉ある糸賀一雄記念未来賞を受賞できましたのも、私一人の活動によるものではないと思っています。一緒にやってきた小児科の仲間、そして三方よし研究会やチーム永源寺の皆さん、永源寺地域に住む人々、そして私の家族に感謝を申し上げ、私のスピーチとさせていただきます。本日は本当にありがとうございます。

「生きづらさを 抱える人の支援を考える」

■ シンポジスト：奥田 知志（記念賞受賞者 特定非営利活動法人抱樸理事長）

寺尾 徹（全国社会福祉協議会常務理事）

■ コーディネーター：

大熊 由紀子（国際医療福祉大学大学院教授）



受賞にあたり糸賀先生の経歴を改めて学ばせていただきすごい人だと思いました。そのようなすごい人の賞をいただき、今はうれしさとともに身の引き締まる思いです。

寺尾さんとの関係ですが、私はホームレスの支援

をいただき、ありがとうございます。

奥田…糸賀先生の賞

うか？

大熊…お二人はお知り合いだそうですね。どのように出会われたのでしょうか？



大熊由紀子さん

〈ホームレス支援から始める〉

を長く関わってきました。2002年にホームレス自立支援法ができ、支援に関わる横のつながりを作ろうと2005年ごろから厚生労働省社会・援護局の地域福祉課によく押しかけ話をさせていただきました。二人目の課長が寺尾さんでした。

寺尾…ホームレス支援をされている方だとは知っていましたが具体的な活動内容までは知らず、熱心な方だというのが第一印象でした。

大熊…受賞されたご活動について紹介していただけますか？

奥田…ホームレスの支援を始めて30年近くになります。

路上からの脱出から始めましたが、もともと大事なことは、地域での暮らし・生活が継続することでした。

運動会（ゴーイングホームデー）には、毎年300人近くが集まり今年で9年目となります。野宿から脱出した人たちによる運動会は、たぶん世界でもここだけだと思います。

写真の前方に子どもたちが写っていますが要支援の子どもたちで、学校に行ったことがない子どもたちが多く、ここで初めて運動会を経験する子があります。年寄りばかりのチームなので、元気な子どもたちは引っぱりだことなり、スターとなって役割を果たしています。

奥田…NPO法人抱樸の活動開始から今年29年目を迎えました。当初はホームレスがいなくなる社会を目指しましたが、今では半分困難と感じていま



奥田知志さん

す。社会の構造が変わり、取り戻そうとしても、戻るところさえ分からなくなってしまう。これまでに2,900人の自立を支援し、自立達成率93%となっています。再ホームレス化を防ぐ生活継続率は92%と高い率となっています。有給職員は104名おり、元ホームレスの雇用の場を作ろうと全職員の30%の有給職員化を目指しています。15・4%（16名）にとどまっています。

〈抱樸が目指す社会は「助けてと言える社会」〉

奥田…抱樸の意味は、原木をそのまま抱くということです。行政の申請主義では困窮者は相談しないことから手遅れとなる例が多く、そのまま抱くことに意味があります。原木であるから刺々しくもあり、抱く者は時には傷つくことがあります。社会とは多くの人が健全に傷つくための仕組みと考えています。

経済的困窮はハウスレス。金・ものの困窮へは、食事・衣類の提供、住宅の設定を行う。社会的孤立はホームレス。家はあるが誰からも心配されていない人、人間関係の崩壊している人。両者は、互いが絡み合ってスパイラルに陥っているのです。伴走は手段でなく目的と考えています。支援する物に、人が関わることで物語化する。それを伴走支援と言っています。地域づくりとは、物語をいくつ作れるかではないかと思っています。伴走支援はバスジャック事件がきっかけとなりました。

〈「生きること」に意味がある〉

奥田…精神病院入院患者の息子が起こした事件について、母親が何かを起こすのではないかと医師や



児童相談所等に相談したが「動いて下さる先生は一人もいらつしやなかった」と手紙に書かれていたのを聞いて、治すことはできないが、一緒に右往左往することでその人の力になるのならできる。これが伴走支援のしくみの入り口となりました。相談には、問題解決と、相談そのものの、二つの意味があります。

意味のない命、意味のある命、この分断はあってはならないのです。「人は（出会いによって）いつか変わる。」をテーマにホームレス支援を始めましたが、その前に「人は変わらなくても生きる。」を前提としなくてはならないことに気が付きました。「いのち」・「生きること」に意味があるのです。**大熊**…私、修士・博士論文に取り組んでいる大学院

生の伴走をします。問題解決までなかなかたどりつきませんが、「伴走していることに意味がある」とうかがい心穏やかになりました。

今の活動内容をお聞きになり、厚生労働省に長くお勤めになり、今は全社協の責任者をされている寺尾様の感想はいかがでしょう。

寺尾…私が大学に行くため上京したころ、高校の恩師が退職し障害者

施設の職員になられたので職場を訪

問し初めて障害者に触れました。超

エリート商社マンが交通事故で脊椎

損傷となり車イス

生活をしながらリハビリに励んでおられたが、会社をクビとなり、奥さんから離婚を申し立てられ

る中で、施設の中で首をつられた事例を知りました。これはまれな事例ですが、多くの方々は障害

を受容しそれを乗り越えて新たな人生に立ち向かっていかれる姿に感銘し、少しでもこうした方々の力になればと考えて厚生省の役人になろうと思いました。

同対策の係長をしているとき整備事業により古い木造住宅の地域から、きれいになったマンシ

ョン形式の改良住宅で孤独死が発生した。改良前にはプライバシーがないほどの風通しの良い関係性

が、鍵のかかる独立した住宅になったことで関係性が希薄となり発見されるまでに一週間もかかったことに衝撃を受けておられた。それ以降、集いの場をたびたび開催し住民の方々の孤立化の防止



寺尾 徹さん

に努めているとの話がありました。

コミュニティが崩壊し、助け合いの社会から人の繋がりが薄くなった時代となりましたが、これをどう立て直していくかがこれからの地域共生社会の課題だと思っています。

〈「命の分断」という現実〉

大熊…最近の座間の事件や相模原の事件をどう思われますか。

奥田…相模原の事件の彼は「いいことをやっているという」確信に基づいて行つた確信犯です。彼は、障害者は生産性のない人々であり、亡くなったほうが日本の経済のためにより、障害者は家族を不幸にするだけだと「命の分断」を行っています。

ホームレス支援においてもホームレスは街のゴミとされ「命の分断」だと感じてきました。ホームレス支援よりはるかに長い歴史のある障害福祉の分野で起こった事件であり、大きな衝撃を受けています。「命の分断」が大きな問題となっています。

大熊…受賞なさった方々は、まったく逆なことをされていきます。私は、やまゆり園が大きな施設として山奥に作られた時点で、政治や行政が入居者を社会的に殺していたのではないか、彼はそこに（隔離された施設の職員として）入っていたことで頭

がそのようになったのではないかと思っています。同じ神奈川県にある重度心身障害児者支援の拠点「朋」、兵庫県西宮の「青葉園」は街の中にあり、地域と交流しています。朋の理事長の日浦さんは、「糸賀一雄先生の『この子らを世の光に』は人々にその光が見えることが前提です。この子らが世に見えるようにしなければ」とおっしゃいました。

障害のある人を辺鄙な場所に隔離してしまえばだれにも見えないのです。

奥田さんがやっておられる「生笑（いきわらい）」の活動は、このこととつながると思いますけど。

奥田…「生笑」一座をやっていますが「生きてさえ

いれば、いつか笑える日がくる」というホームレスの体験者による一座です。彼らが話すことが共感を生み、ホームレスの人々を知らないことからくる恐怖を減らすためにやり始めました。「ホームレスを知らないから怖い、だから石を投げつける」につながるように、という思いからです。

奥田…今の社会の価値の中でのホームレス問題の解決には限界があります。今の社会の価値を変える価値転換を図らなければなりません。糸賀先生の発達保障、その子の発達に合わせた社会に変えていく、と同じだと考えます。

〈生きていれば笑える日がくる〉

大熊…子どもたちからは、面白い質問があるようですね。

奥田…中には、「死のうと思っていた。生きていれば笑える日がくるというからもう少し生きてみます。」という感想文も少なからずあります。子どもたちが「助けてと言うことができない」ことに、この国の闇があります。子どもが自ら命を絶つ。これは大人が「助けて」と言えない社会だからです。

私は、助けてと言えなかった人たちが、言った日の話をして回っています。このことが子どもたちにとっては新しい価値になると思っています。

大熊…「いのちは大事ですよ」という百万回という

より、死のうとした当事者の一回の言葉の方が、効果があるように思います。

最近「居場所、味方、誇り」が大事という本を書きました。それを剝ぎ取られているのが、精神病院に入院している認知症の方々です。

ホームレスと認知症の関係はどうでしょうか。

奥田…全体の4割は知的障害を持っています。高齢の人が多いので認知症の問題はありますが、認知は社会的な現象で回りがどう認知しているかという関係の中での話で、その人の認知症を切り取ってのやり方はどうかと思います。

「生産性のないものは死ね」に対し、糸賀先生は「人が人となっていくことが生産である」と言われています。そういう意味で「生笑」の人たちは高い生産性がありますが、社会の求める金儲けの理論からは外されています。

ホームレスをなくすため駅からベンチが取り外されました。そのことでどれほどの人の命が危機になったか。命はつながっているから一つの命を排除すると色んな命に波及します。そのことがわからない時代、我々はそれほど分断されている、と思っています。

大熊…私は、生きづらさを抱えた方々を先生としてお呼びする「でんぐり返しプロジェクト」という公開講義を続けています。

先日お呼びした海老原宏美さんは人工呼吸器と胃瘻をつけながらニコニコして講義なさいました。そしておっしゃいました。「やまゆり園に入所しているような人を排除したら、次の弱い人が同じように排除されていき、それがくりかえされて、気が付けば自分の番になっているのです」と。

元トップセールスマンだった39歳で若年認知症と診断された丹野智文さんは、教科書的には「2年で寝たきりになる」といわれていましたが、今も仕事を続け、国の政策にも影響をあたえてくれました。そして、支援者より、ともに歩んでくれるパートナーがほしいと望んでおられました。生きづらさを抱えた本人の生き生きとした姿に触れると人々は変わるのでしょいか。

〈決まった価値の中では何も見えない〉

奥田…そうだと思います。決まった価値の中では何も見えないのだと思います。

糸賀先生のおっしゃった、「この子らを世の光に」の言葉は、聖書ヨハネの一章から取られたのだと思います。元の言葉は「闇の中に光が輝いている。そして闇は光に勝てない。」でも、量においては闇の方が圧倒的に多い。この闇の多さの中に本当の光が見えてくる、という逆説的なものです。キリスト教の中には、本当のものは隠されている、ルターは隠れたる神という概念をいうが、命は死の中に隠れているのだと言いました。

糸賀先生は、ストレートに光のことを言われたのではなく、ずーっと闇を見つめられた中で光を語られたところに逆説的なものを感じます。

大熊…聖書とつながった言葉とは、今日初めて知りました。

寺尾さんから結びをお願いします。

〈子どもたちへの福祉教育が

「コミュニティを変える」

寺尾…コミュニティの崩壊に対処どう取り組みれば



よいのか大変難しい課題ですが、奥田さんは伴奏支援という形で実践をされています。

その際に、子どもさんと一緒に夜回りをされています。それが体現的な福祉の心の育成につながっています。やまゆり園の犯人も、早くから福祉に接することができていれば、あの優生思想のような気持ちにはならなかったのではないか、と思います。

奄美で地域包括支援センターを運営している友人の子どもさんは、ゴミ出しに困るお年寄りの家を回り、ゴミ出し支援をしています。

滋賀県においても、県社協と社会福祉法人が中心になって縁創造事業を実践されています。社会福祉法人が社会貢献の一環として行っているもので、

「こども食堂」等地域の福祉ニーズに沿った活動
されています。

こうした活動が全国で進められており、現在25府
県で実施されており残りの22都道府県も準備が進
んでいます。

花戸先生が説明された色んな関係機関が連携し社
会福祉協議会などがプラットフォームとなりその
地域を支え、子どもたちへの福祉教育とともにコ
ミュニティーをもう一度再生させる活動にこれか
ら取り組むことが大事なことだと思っています。

大熊…滋賀県社会福祉協議会の話が出たところで、
県社協の会長をされている渡邊光春さんが、県の
課長時代に後ろの壁に貼っておられた言葉を思い
出しました。

「真剣だと知恵が出る。中途半端だと愚痴が出る。
いい加減だと言いつけが出る。」というものです。
受賞の皆様は、愚痴ではなく知恵を出されて、そ
れだけでなく、世の光になってくださる方ばかり
でした。

皆様の活動が、社会全体によく見え、世の光にな
るにちがいないと、希望がわいてまいりました。
今日はありがとうございました。

